



第38卷 第4号

史学・地理学・考古学

- パークス非難論争……………杉 井 六 郎 ( 1 )  
 ——条約改正史の一齣——
- その後の課役の解釈問題……………曾 我 部 静 雄 ( 28 )
- 歴史の原初形態としての呪術神話と  
 呪詛における「系譜」への関心……………池 田 源 太 ( 44 )
- チベット人のデモクラシー……………川 喜 田 二 郎 ( 56 )  
 ——ネパールヒマラーヤの観察から——
- 史学研究会名誉会員京都大学名誉教授羽田亨博士訃…………… ( 68 )

書評と紹介

- 周藤吉之：中国土地制度史研究……………勝 藤 猛 (75)
- 竹内理三：日本封建制成立の研究……………上 横 手 雅 敬 (78)
- G. トムソン著：ギリシャ古代社会研究……………村 田 数 之 亮 (82)  
 池 田 薫 訳  
 ——先史時代のエーゲ海——

学界消息

史 学 研 究 会

京都大学文学部内

京都大学文学部東洋史研究  
**東洋史研究**  
 振替口座京都三七一八

新入会員

石川 明	
岡田 公之	
大阪書籍株式会社編集部	大阪市西成区津守町東二丁目五二
小野 純子	
金田 俊昭	
遼 日出典	
菊池三枝子	
城南高校図書部	宇治市広野
杉江 幸子	
竹田 安雄	
塚本 俊孝	

遼山 泰之	
西山 幸治	
弘前 大学	
古沢 文吾	
丸 善	京都市中京区河原町蛸薬師
三浦 圭一	
三木 雅文	
美村 末寿	
村川 行弘	
森住書店	徳島八百屋町二丁目十二
森山 太郎	
矢田 昌子	

ろうか。財産観念とその制度はどうであろうか。要するに、マリノウスキーではないが、もつと文化と人と土地との機能的関連を掘り下げつつ分布に注目を払えば、幾つかの問題が案外にレットルの異同に拘わらず証明されてくるのではないだろうか。

ともあれ、チベット人は皮肉なことに日本人よりも「民主主義者」であり、しかも男性ばかりでなく、少くも主婦の権力は、夫たち以上らしい。そして民主主義の根は大抵まで下りているようであ

る。「いとうべき一妻多夫制」と幾人かのクリスチャンは叫んだ。しかしそれは彼らの統合された文化の中に置いて理解されるべきものである。そして彼らのこの文化——装ズンダス置としての文化——によらずして、あの厳しい世界の屋根を、より多くの人間の生命で充たし得ると断言することは、進歩した現代社会の文化を以てしても、果して今なお可能であろうか。

このような立場であるから多少の強引さは目につくし、幾つかの誤りも指摘されよう。たとえは十章 ミュケナイの章においても、クノッソス破壊後は、後の遺物の中に異民族の侵入によることを暗示するものはない。この侵入者はミノア文明と同化していたと想像せざるをえない(下・八七頁)とあるが、それが異民族の侵入なることは考古学上からもとくに証明されている。彼が引用しているベンドルベリーの書物を一見しても明かである。またミニュアイ人はミノア化されたベラスゴイだとするが(上、一八四頁、下、九〇頁)この場合(ベラスゴイはふれないでも)においてはミニュアイ人とミニュアス土器とは多少し区別されねばならない。ミニュアス土器はミノア文化と関係が全くないから。またミュケイ時代のギリシアとエジプトとを関係づけるために、エジプトの第十八王朝の墓壁画から推測してミュケナイの商人達が十五世紀にケミスに植民しなかつたという理由はない(下、九六頁)というが、私はその可能性は考えるけれども、トムソンの結論は早急すぎると思う。同じようにイオからしてイオニア人とエジプトとの関係を証明するのも、少し強

引なようである。その他、全体についても古代史に対して神話や民族学を適用する場合の限界は、なかなか私には定めにくい。

しかしともあれ、これまでには本書ほど、ギリシア古代社会について包括的根本的にしかも割切つて書かれた研究はない。多くの史料の自由な駆使と努力は並ならぬものである。それ故に、たとえ立場を異にするとも、トムソンが、提出した解決点、解決の過程の中には多くの暗示とヒントを汲みとらざるをえない。そしてわれわれも自らその一々を再考し吟味してゆくところに、多大の収穫がえられると思う。最後にトムソンの意気と意図とを明示する序文をあげておかねばならない。そこで彼は「すでに過去幾年にもわたつて凋落の一途を辿り」「人類の進歩を促す勢力との接触を失つて」、「未来から逃避する隠家」となり「かいたなき努力を続ける少数のひま人の道楽となつている」ギリシア研究の「価値を回復」するのは、マルクス主義による外はない。マルクス主義こそ「歴史上最も多事であつたこの四世紀間によつて豊富にされたヒューマニズム」であると。

訳文については明確で申分はない。ただ所

所にでてくる「ヘラス文明」は我国では「ヘラディック文明」の方が、使われているように思う。この大訳を完成された訳者に敬意を表わしたい。(上巻六百五十円、下巻九百円、岩波書店)

——村田数之亮——

### 執筆者紹介

杉井 六郎	京都大学大学院学生
曾我部静雄	東北大学教授
池田 源太	奈良学芸大学教授
川喜多二郎	大阪市立大学助教
勝藤 猛	京都大学大学院学生
上横手雅敬	京都大学大学院特別 研究生
村田数之亮	大阪大学教授

史学研究會々則（昭二九・一一・一改正）

- 第一条 本会は史学研究會と称する。
- 第二条 本会の事務所を京都大学文学部陳列館内に置く。
- 第三条 本会は京都大学文学部史学科を中心として同好の士相集り史学に関する研究をなすことを目的とする。
- 第四条 本会の事業は概ね左の通りである。一 會合  
二 研究調査及び見學 三 會誌（史林）等の發行
- 第五条 本會に理事長三名、理事五名、監事三名、評議員十拾五名、及び委員若干名を置く。
- 第六条 理事長、理事及び監事は評議員の選出による。理事長は本會を代表し、會務を統轄し、會員總會、理事會及び評議員會を召集する。理事は理事會を構成し會務を處理する。監事は會計經理を監査する。
- 第七条 評議員は會員總會においてこれを選出し、會務の諮問に應ずる。
- 第八条 委員は理事長これを囑託し、編輯、庶務、會計の実務を分掌する。
- 第九条 役員は任期は二年とする。但し再任する事が出来る。
- 第十条 本會の目的を賛し新に會員にならうとする者は、入會申込をなし理事會の承認を受けることを要する。
- 第十一条 會員は所定の會費を納入して、本會の會合に出席し研究調査、見學その他の事業に参加し、會誌「史林」の配布を受け且つこれに投稿することが出来る。
- 第十二条 毎月一回例会を開く。會場等はその度にこれを定める。毎年秋季に於て總會を開き研究、調査、見學を行い及び會務の報告をする。
- 第十三条 本會の経費は會費、事業収入及び寄附金を以て支弁する。
- 第十四条 會費は誌代を以て會費とする。
- 第十五条 本會のため功績顯著な者は評議員會の議決により名譽會員に推薦することが出来る。
- 附則 本會則の変更は、會員總會の決議によるものとする。但し會務執行に必要な細則及び物価變動に基く會費金額の変更は理事會がこれを行う。

編集後記

窓越しに見える松の木に 今日も又雨が降りそそいでいます。今そこそ水害のなからんことをと祈りつつ筆をとります。

すでに御承知の如く、本會の創立以來、陰に陽に、本會の發展の爲に御配慮を下さいました羽田先生が、おなくなりになりました。私達が先生の御力にお報いする道は、益々本會を發展充實させてゆく以外にはありません。史学研究會の、史学・地理学・考古学を綜合している特色を、十二分に發揮しようように努力致しております。七月の特例會に、「時代区分及び地域区分」の問題をとりあげましたのも、又「共同体」特輯号を企劃致しましたのも、その一つの現れでございます。どうか今後とも、會員の皆様が積極的な御意見を御寄せ下さるよう御願ひ申し上げます。

（狩野）

一九五五年 六月二五日印刷  
一九五五年 七月一日發行

定価 百円

史 林 (第三八卷 第四号)

發行所 史 学 研 究 會

京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部内

振替 京五二五五番

理事長 原 隨園  
編輯主任 赤松 俊秀

印刷所 中村印刷株式會社

京都市下京区七条御所ノ内 東町三九

**THE SHIRIN**  
or the  
**JOURNAL OF HISTORY**

---

Vol. XXXVIII, NO. 4

Jul. 1955

---

**CONTENTS**

**Articles:**

- The Denunciations against Parks — Some Hints on  
the History of the Treaty Revision.....*M. Sugii* ( 1 )
- A Further Comment upon the Interpretation of  
K'ō i (課役) ..... *S. Sogabe* ( 28 )

**Short Notices:**

- Significance of the Genealogy in the Magic Myth  
as the Threshold of History..... *G. Ikeda* ( 44 )
- Democracy in the Tibetans.....*J. Kawakita* ( 56 )  
— from some Observations in the Nepal-Himalayan Districts—

**Book Reviews & News**

---

*Published*

*by*

THE SHIGAKU KENKYUKAI  
(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan